

## 中等科・高等科

# コロナ禍での生活と学びの工夫「ICT を活用したハイブリッド学習の実装」

山本太郎

『オンラインでは学べないものがある』実物に触れて学ぶ機会を多く持つ学園に限らず、日本の教育界で言われてきたことである。しかしそのうちどれだけの人が実際にオンライン学習の可能性を精査していただろうか。当然オンライン学習は万能ではない。しかし新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、学校に集って学べない状況が現実になったなかで私たちが向き合ってきたのは、いかに『オンラインでの学びを有意義なものにするか』だった。本稿では2019年度末から現在に至るオンライン学習実装の歩みを振り返り、そのなかで見えてきた方向性や今後の展望に焦点を当てる。

### I. オンライン学習の実装

#### 1. ～2019年度

中高では2018年からICTの導入について検討が進められてきた。

2016年度には教室内に電子黒板と無線LAN環境が整備され、2018年度からは常勤教職員に対して1人1台のiPadの配布が開始された。それらを教室備え付けのAppleTVと合わせて使用することで、様々な授業展開を可能にした。

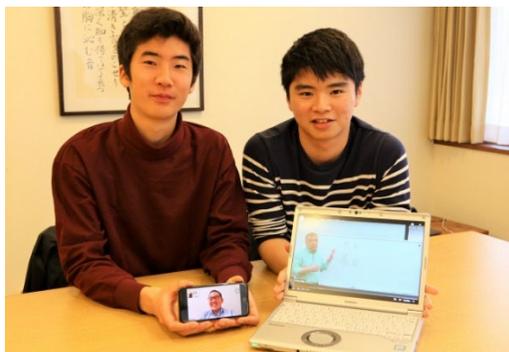
同時に生徒がデバイスを1人1台保有する計画も進められてきた。当初はiPadを学校で購入して生徒に貸し出すという他校でも多く導入されているスタイルを検討していたが、それでは学びがいつまでも与えられたものになり、学びの場も授業時間に限定されてしまうのではないかという危惧があり、BYOD（生徒自身が任意のデバイスを購入して自己管理において使用するスタイル）の可能性を検討した。その検討が実装段階（後述）で活かされることとなった。

#### 2. ～2019年度末

2019年2月下旬、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、登校を中止し、寮を閉鎖する方針が決定された。学期末試験を直前に控え、生徒たちに向けては自宅でも学習を継続するリソースの提供が求められた。男子部ではGoogle driveを用いた簡易的なプラットフォームを作成し、クラ

ウドを介して生徒と教員が課題の送受をできるようにした。Apple や Microsoft のクラウドに比べて使用するデバイスが規定されない Google 社のコンテンツを用いることで、生徒たちがすでに保持しているデバイスからアクセスすることを容易にする狙いがあった。生徒たちは数少ない説明機会でも積極的に理解を進め、3学期のオンライン課題は大多数の生徒がオンライン上で提出することができた。

またかなり早い段階から一部の生徒たちが、この時期だからこそ学ぶべきことがあるはずだと考え、著名な方々にインタビューをして「平和で持続可能な社会づくりのための学び」と題してオンラインで動画を公開した。このように生徒たちが「我が事」として学校を捉え、積極的にオンラインを活用して発信・共有しようとするアクションはそのあとも数多く生まれた。



〈オンライン企画を行なった生徒たち〉



## 5. ～2020年度2学期

8月24日の登校再開が決定され、初めて全生徒が登校することになった。寮内でもオンライン学習が実施できるよう、また1か所に集まらなくてもコミュニケーションが取れるよう、清風寮・東天寮ともに無線LANが設置された。また教室にはそれぞれ備え付けのiPadが設置され、教室の様子を配信する際のカメラとして、あるいは全校での報告や礼拝などを教室で共有するための機器として現在も日々使用されている。

自宅ではデスクトップPCを使用していた生徒などに向けて、貸し出し用のiPadも手配した。寮の収容人数を大幅に削減したため、遠方から通学する生徒が増えたことに配慮して、1、2時間目はすべてオンライン授業として、3時間目から対面での授業を行うこととした。(生徒や教員の声を受け、3学期からは、オンライン授業は1時間目のみとし、2時間目から対面での授業を行った。) また日々の検温を抜かなくチェックし、学年内での体調不良者の存在をいち早く把握するために、Google スプレッドシートを用いて毎朝夕に入力することを義務づけた。



〈購入した貸し出し/備え付け用 iPad〉

## 6. ～現在

生徒の登校が再開されたことで一番大きく変わったのは授業以上に課外活動や自主活動だ。生徒たちが「我が事」として学校の運営に関わる場面は以前から多くあったが、その話し合いや共有、提案などにもオンラインが活用されるようになった。生徒たちはあたりまえのようにプレゼンテーショ

ンコンテンツを使って資料を作成し、動画をYouTubeにアップして共有している。またformなどを用いてアンケートを取りお互いの考えや意見を集約する手法もいまや一般的になった。一方でデバイス使用のモラルやガイドラインも生徒の手によって見直しが絶えず行われている。

保護者会も20年度からは全てオンラインで行なわれている。対面だからこそ生まれる空気があることも事実だが、遠方の方も(海外在住の方も!)気軽に参加していただけるなど、オンラインならではの良さも確かにある。

もちろん授業のなかでも絶えず振り返りと改善が行なわれている。オンライン授業の時間を生かして「反転授業」に挑戦した教員、生徒の課題を動画での提出として相互評価しやすいデザインにした教員、全ての授業の解説動画をアップして学び直しができるようにした教員など、それぞれの実践がお互いに見えるようになり、教員間の刺激にもなっている。



〈調べ学習の様子〉

## II. オンライン導入による変容と気づき

### 1. 教員の授業観・生徒観の変容

これまで毎年同じ教材を繰り返したり、マイナーチェンジに留まっていた教員も一部にはいたが、オンライン授業の導入により、教員は授業の抜本的な作り直しを迫られた。またネット環境も端末の種類や習熟度も異なる生徒に応じて、様々な方法を用意しなければ学習の機会が保障できない状況は「生徒は一人ひとり異なるニーズを持ち、必

要な支援も異なる」ということに気づく機会ともなった。

## 2. 教職員の関係性の変容

これまで、同じ敷地内にいながらも部署を超えた交流は限られていた。今回の準備を進める中で、はじめてコミュニケーションをとった教職員も多くおり、部署や教科を超えて学びあう機会が促進された。教職員自身が関わり合い切磋琢磨することは、生徒学生にとっても必ずよい効果を生むはずである。

## 3. 「主体性」の重要さへの気づき

学びの主体は自分自身だということがこれまでになく強調される機会となった。従来は、教室にいれば教員が入れ替わり現れ授業が提供されていた。また友人の影響を受けたり流れに乗って、何となく行動選択することも可能だった。一方で今回は、時間割はあるが実際に何をするかは決定し行動する自由が与えられていた。自宅学習期間には寮の『集中勉強』の時間もなく、生徒は学習の決定と実行を全面的に引き受けることになった。これは苦しくも有意義な、学びに向かう姿勢を問い直す機会だったのではないか。

4. 『オンラインでは学べないもの』への気づき  
まだ自宅学習が続いていた1学期から、全校懇談や異学年での交流会が両部とも生徒の声で実施された。また教員は自然に『実際に手に触れて学ぶ』『関わり合い学び合う』学習活動を模索していった。種子や実験道具を郵送して行なった理科の授業や、部を超えた美術のプロジェクトはその好例だ。今後どれほど技術が発展しても学校が存続する意義は「他者と出会う場」としての機能にあることが再確認された。

## Ⅲ. おわりに

20年度途中から、全国でも例を見ないスピードでオンライン学習を構築した学校として、本校は幾度かメディアで取り上げていただく機会に恵まれた。それは大変ありがたいことではあるが、オンライン学習は学びの選択肢の一つ、手法の一つにすぎず、それを以て先駆的だとするのはやや短絡的だとも感じた。

今回の実践を通して、オンラインの学習環境が整備された、という成果以上に価値があるのは、教員が生徒の学びのために柔軟に変容と試行錯誤を繰り返せたこと、生徒一人ひとりの学びが今まで以上にフォーカスされたこと、生徒自身が学びのオーナーシップを発揮できるようになったこと、に他ならない。

それゆえに、私たちがこれから目指す学びのかたちは決して単なる「オンライン学習」ではなく、オンラインと対面が、個別と協働が、レクチャーとプロジェクトが、教員と生徒が、学校と地域が、混然一体となった「ハイブリット学習」とでも言うべきものなのではないか、と私は考える。



〈作成したプレゼンをグループ内で見せ合う〉

## Ⅳ. 謝辞

情報科の藤清人さん、中村佐里さんには高い専門性から貴重なサジェッションをいただいた。広報本部に在籍していた西岡朱里さんにはタブレットの導入や活用について独自のネットワークを生かして多くの知見をいただいた。

総務部の柏原健一さんと常任理事のみなさんにはデバイスの導入に際して格別のご配慮をいただいた。

CM 本部のみなさんには登校再開に向けて迅速に学内のネット環境を整えていただいた。

国立感染所の菅原さんと健康管理室のみなさんには検温チェックのシステムについて貴重なご意見をいただいた。

(株)教育産業のみなさんには無茶な日程にもかかわらず必要なデバイスを確保していただいた。授業担当のみなさんには、急な方針決定にもかかわらず使命感を持って授業構築に挑戦していただいた。

もちろん保護者の皆様には、デバイスの手配も含めて多大なご負担をおかけしたにもかかわらず、学園を信頼してご協力いただいた。

この原稿はご依頼をいただき山本がまとめることになったが、タスクフォースは遠藤智史さん・金井知子さん・菅野広樹さん・近藤紫織さん・鈴木雄紀さん・鈴木裕大さんという若くエネルギー溢れるメンバーで構成されていた。このメンバーの献身的な働き無くしてこの実装とその先に続く変容はあり得なかったことを文末に申し添えて結びとさせていただきます。